様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０２７２０

研究課題名（和文）ラレル文の史的展開に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Research on the Historical Development of the Rareru-Sentences

研究代表者
川村　大（KAWAMURA, Futoshi）

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授

研究者番号：５０２３４１３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、動詞ラレル形（「動詞+レル・ラレル、ル・ラル、ユ・ラユ」の形）を述語とする文（以下「ラレル文」）における諸用法の史的展開を、構文的特徴を中心に文献調査に基づいて明らかにすることを目指した。主な活動は次の2点である。１ 中世の文献にもとづくラレル文の用例調査２ 古代日本語・日本語文法・言語類型論の関連文献並びに注釈書の収集、また学会等への参加を通じて最新の知見の体得に努める。
　活動１は、研究期間中補助員の適任者を確保できなかったうえ、研究機関中学内の役職に就いたため研究に時間を割くことが著しく困難となり、残念ながら未達成に終わった。活動２は、ほぼ所期の目的を達し得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
１ 古代語動詞研究・言語学への貢献：動詞の格、他動性、ヴォイスなどをめぐる従来の研究に資する堅実なデータを提供すると共に、当該分野に関する新たな知見を得ることが予想される。また、古代日本語と現代日本語、あるいは諸外国語との間の対照言語学的な見地からも利用可能である。
２ 社会的貢献：本研究の副次的な効用として、古文教育や、古語辞典記述に応用できる知見・資料を提供できるようになることが期待される。

研究成果の概要（英文）：　This study aims to clarify the historical development of various usages of sentences with the verb rareru-form (the form of "verb + reru/ rareru, ru/ raru, yu/ rayu") as the predicate (hereafter "rareru sentences") based on a literature survey focusing on syntactic features. The main activities of this project are as follows: 1) to investigate the usage of rareru sentences based on medieval documents; 2) to collect annotations to the classics and research documents related to classical Japanese language, Japanese grammar, and linguistic typology, and to acquire the latest knowledge through participation in academic conferences.
　Unfortunately, Activity 1 was not accomplished because I was unable to secure suitable assistants during the research period, and it became extremely difficult to devote time to the research due to the fact that I took a position within the university during the research period. Activity 2 almost achieved its intended purpose.

研究分野：日本語学

キーワード：受身　自発　可能　尊敬　受動　ラレル　出来文　ヴォイス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ラレル文は受身・自発・可能などを表す多義構文であるが、また同時に、対応する文（動詞のレル・ラレル非下接形を述語とする文）との間に、規則的な格体制の異なり（いわゆる格交替）が有ることが知られている。各用法についての記述的・理論的研究は、現代語を中心に膨大な業績が存在する。しかしながら、各用法がどのような史的展開を経て現代語にみられる様相を呈しているかについては、いくつかの研究はある（受身について堀口(1983)、金水(1991)、韓(2010)など、可能について渋谷(1993)など）ものの、十分に明らかになっているとは言えない。とりわけ、各用法において、動作主項目や動作対象項目にどのような種類の名詞が立つか、また、それぞれの項目がどのような格表示を受けるか、といった構文的特徴をめぐる通時的展開については、まだ追求すべき余地が多い。

例えば、諸用法の格配置についての包括的整理は、川村（2005,2012）において上代・中古の和歌・物語を対象としてなされたのがほとんど最初である、比較的よく調査されている非情物主語受身文ですら、古代語からの通史的調査は清水(1980)以後なされていない。間接受身文の発達過程については堀口(1983,1990)の概略的な議論以後、古代語に関して川村(2012)の検証がなされたが、中世以降については手つかずである。可能文の構文の変遷は渋谷(1993)の調査を除くと、古代語の川村(2005,2012)の調査の他はもっぱら近世～近現代の格支配に関する調査のみ。自発文については川村(2005,2012)以外ほぼ手付かずである。また、川村(2012)以前の諸業績は、ラレル文をめぐる今日の知見の蓄積や問題関心の高度化に伴い、十分満足できるものではなくなっている。今日的な観点を反映した、より詳細な再調査が求められている。

応募者は、既に基盤研究（Ｃ）「出来文の通時的変化に関する基礎的研究」（課題番号 23520548）において、中世・近世のラレル文の格配置について調査を進めてきたが、川村(2012)などによる理論的枠組みの整備を受けて、さらに調査を進め、中世・近世のラレル文の用法の実態を明らかにしようとするものである。

２．研究の目的

主たる調査事項は以下の３点である。ただし、古代語については既に川村(2012)で一定程度明らかにされていることから、いずれも中世・近世における調査に注力する。

１　間接受身文の種類の変遷

堀口(1983,1990)によれば、古代語の間接受身文は他動詞を用いたいわゆる「持ち主の受身」や「競合の受身」にほぼ限られており、「子供に泣かれる」のような本格的な自動詞受身文は近世以降の成立という。しかし、堀口の議論は作品ごと・種類ごとの用例数を示さず、論証過程にも種々の問題が認められる。川村(2012)や前記科研費による調査によって、古代語および鎌倉期においては（いくつかの留保が必要であるものの）おおむね堀口の主張通りであることが確認されたが、さらに中世末期および近世における状況を明らかにしたい。

２　非情物主語受身文の諸下位類の量的変遷

従来の研究は、非情物主語受身文を一括してその総数を文学作品ごとに数えるという調査のみである。しかし、非情物主語受身文には、動作主表示のあり方や意味的特徴をめぐって、相当異質な下位類が存在する（川村 2012 ほか）。近代以降欧文直訳体の影響で発生したとされるタイプの非情物主語受身文（金水 1991 ほか）の内実をさらに明らかにするためにも、複数の下位類が存在することを意識した通時的調査が必要である。

３　自発文の変遷（格表示、意味的下位類に着目）

古代語では自発文・可能文の格体制は同一で、「動作主項φ、対象項φ・ガ・ノ・ヲ」というものであった。現代語では自発文・可能文ともに動作主項をニ表示するようになった上、自発文では対象項目をヲ表示することは（ほぼ）なくなった（川村 2012 ほか）。この変化がいつ起きたかについて調査する。また、自発文の意味的類型は現代語では減少している（先述）が、この点をめぐる歴史的変遷過程も調査する。

３．研究の方法

以下の２つの活動を計画した

１　ラレル文の用例の抽出、データベース化

中世～近世の通時的変遷の大略について一定程度の見通しをつけることを目指し、各時代の主要な資料数点の調査に留める計画であった。

南北朝期：覚一本平家物語、室町末期～近世初期：天草版伊曽保物語、近世前期（上方）：近松浄瑠璃、洒落本、噺本、近世後期(江戸)：洒落本、滑稽本、人情本

２　古代日本語・日本語文法・言語類型論の関連文献ならびに注釈書の収集

古代日本語や日本語文法・言語類型論に関する近時の知見を得るため、近時新たに出版されたものを中心に、古代日本語・日本語文法・言語類型論に関する図書や関連する雑誌論文を収集する。また、使用する資料や、同時期の文学作品の購入可能な注釈書類をできるだけ購入し、不可

能な場合は複写を図る。
　研究代表者の勤務校は外国語大学であるため、古代日本語の資料・研究文献が他大学に比べて整備されていないし、大学共通の図書予算での購入はあまり期待できない。一方、当該分野の資料を購入する研究者は、勤務校内で研究代表者以外に期待できない。これまで研究代表者の継続的購入により、関係文献の整備はある程度果されているが、今後の研究遂行のため、継続的に整備を進めなければならない。

４．研究成果
　活動１は、研究期間中補助員の適任者を確保できなかったうえ、研究機関中学内の役職に就いたため研究に時間を割くことが著しく困難となり、残念ながら未達成に終わった。
　活動２は、ほぼ所期の目的を達し得た。
　期間中に本研究に関連する辞典の記事２点の執筆、招待講演２件を成しえた。

文献
川村大(2004)「受身・自発・可能・尊敬――動詞ラレル形の世界――」尾上圭介編『朝倉日本語講座 第６巻 文法Ⅱ』朝倉書店
川村大（2005)「古代日本語のラレル形について――古代語の観点から――」『日本語文法』5 巻 2 号
川村大(2012)『ラル形述語文の研究』くろしお出版
金水敏(1991)「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164
清水慶子(1980)「非情の受身の一考察」『成蹊国文』14
渋谷勝己(2003)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33 巻第 1 冊
韓静妍（2010）「近代以降の日本語における非情の受身の発達」『日本語の研究』6 巻 4 号
堀口和吉(1983)「〈はた迷惑の受身〉考」『山辺道』27
堀口和吉(1990)「競合の受身」『山辺道』34

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 川村大
２．発表標題 日本語の受身文をどう考えるか―多義形式の一用法として―
３．学会等名 文法学研究会 第８回集中講義「受身とその周辺 ―日本語の受身は特殊か―」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川村大
２．発表標題 「ヴォイス」について考える―ラル形述語文の検討から―
３．学会等名 日本語文法学会（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 日本語学会編〈野村雅昭、月本雅幸、田中牧郎、阿部清哉ほか）　相澤正夫、青木博史、川村大ほか執筆	４．発行年 2018年
２．出版社 東京堂出版	５．総ページ数 1328
３．書名 日本語学大辞典	

１．著者名 青木博史・高山善行編　池上尚、岩田美穂、川村大ほか執筆	４．発行年 2020年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 158
３．書名 日本語文法史キーワード事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関